

日本産業衛生学会東海地方会

地方会ニュース

発行所 東海地方会ニュース編集事務局
〒541-0056
大阪府大阪市中央区久太郎町2-1-25 JTBビル7F
株式会社 JTB コミュニケーションデザイン
ミーティング&コンベンション事業部内
FAX: 06-4964-8804
発行責任者 齊藤 政彦

題字 皿井 進筆

巻頭言

浜松医科大学医学部看護学科の産業保健・産業看護の貢献

国立大学法人浜松医科大学医学部看護学科 地域看護学講座 教授 異 あさみ



本学は静岡県で唯一の医学部を有する大学であり、看護学科は平成7年に設置されました。本学科は産業保健に強みがある大学として、文部科学省の国立大学の機能強化、所謂ミッションの再定義では、「日本のものづくりの基盤である製造業が盛んな地域特性を踏まえ、産業保健・産業看護の発展・向上を担う観点から、研究・教育により地域に貢献する」とされています。このミッションは、科研費や委託研究費による「事業場における睡眠保健指導の介入研究」等の研究成果を基に、行政や企業の保健師等に睡眠保健指導のスキルアップ研修を実施したデータをエビデンスとして定義されました。睡眠保健指導以外にも「積極的傾聴法」や「職場環境改善の方法」なども同様に研究成果として多くの企業や自治体で研修に取り入れていただいています。

また、この15年間で大学院(修士)地域看護ゼミでは、産業保健師・行政保健師等を対象にした看護学修士

21人を輩出し、現在も4人の院生が学んでいます。学部教育では保健師課程が教員5人(写真1)で構成され、学内の講義や地域や大企業での実習など産業看護カリキュラムの充実が特徴であると考えています。おかげで学部学生の事業場保健師新卒採用者はこの15年間では36人であり、他大学と比較して多いようです。卒業生は主に県西部の企業への就職が多く、その活躍がまた次の学生の採用に繋がっていることを有難く思います。

今までこのような看護学科産業看護分野での活動が続けてこられたのは、講座内の教員同士の切磋琢磨しながらも協力体制があり、さらに県内の本学会員を中心とした産業医、保健師や人事労務担当者、作業環境測定士等(写真2)の皆様からの、研究フィールドの提供や丁寧な実習指導、講義のゲストスピーカーなど、多大なご支援ご協力の賜物であると深く感謝しております。但し、卒業生からは「事業場での保健師の認知度をあげるのはどうしたら良いか」などの相談がよくあり、大学における産業看護職育成の充実と継続教育との連携をより強化する必要性を感じています。

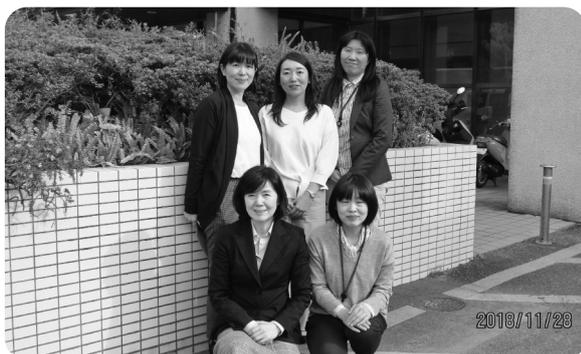


写真1 保健師過程の教員



写真2 学生作業環境測定の様子

開催報告

日本産業看護学会第7回学術集会 開催報告

名古屋大学大学院医学系研究科看護学専攻 教授 西谷直子



日本産業看護学会第7回学術集会在、2018年11月3日、4日の2日間にわたり、名古屋駅近くのウインクあいちにて開催されました(学術集会長:名古屋大学大学院医学系研究科看護学専攻 西谷直子)各地からの参加者が、総数302名と大変

盛況の中、終了いたしました。

今回のテーマは、超高齢社会における産業看護の役割ー健やかな Aging のために今できることーでした。今後ますます進む人口減少と人口に占める高齢者の割合の増加する中、産業看護職が今何をすべきか、何ができるのか、学会を通じて意見交換していこうとする内容でした。生産年齢人口は、1995年をピークに減少傾向にあります。この現状を解決する方法のひとつとして、高齢者の活用が考えられてきました。多くの職場で定年延長が実施され、さらに65歳以上でも働く人々も多くなってきました。しかし、年齢を重ねれば当然、病気のリスクが高まり、家族の介護負担も増えてきます。元気で働けることは、個人にとって良いだけでなく、社会全体にとって重要性を増しています。そして退職後は、住み慣れた地域の中で必要かつ適切な支援が受けられるのか、産業保健と地域保健との連携についても大切な課題です。第7回学術集会では、基調講演として産業保健と地域保健の連携の重要性について、柴田英治先生(愛知医科大学医学部 教授)に『超高齢社会における産業保健と地域保健の連携・協働』について御講演いただきました。講演の中ではいくつかのヒントをいただき、大変参考になり励みとなる内容でした。またメインシンポジウムでは『イキイキと働き、退職後も豊かに生きるための健康支援のあり方』とい

う内容で4人の講師に御講演いただきました。特に地域保健を産業保健とつなげながら実践し、効果を示していただいた東海市の内容は、市全体の取り組みにより、地域全体の健康度アップにつながり、他の地域への取り組みにも大変参考になりました。

さらに病気や介護など課題を抱えながら仕事と両立していくための支援については、シンポジウムⅠ『超高齢社会における健康と就労ー就労支援を考えるー』で、がんに罹患しながら仕事を続けていく事例や実際の介護に関する具体的な内容が聞け、フロアとの活発な討議が交わされました。支援を有効でかつ効果的にするため、産業看護職のコンピテンシーについては、シンポジウムⅡで大学教育の立場から、産業医の立場から、先輩保健師の立場からそれぞれ御講演いただき、参加した学生から積極的な質問と自己アピールがあるなど和やかな雰囲気が進められました。教育講演は精神的課題を持った人の事例に基づく内容を吉田契造先生((株)デンソー 産業医)により個人的にお話いただきました。また産業看護職自らが疲れないためのコツを、笑い感動で松村啓史様(テルモ(株)顧問)にお話しいただき、涙する人が出ていました。参加者からは、今回どの内容も大いに勉強になり、参加してよかったと多くの声をいただきました。大勢の参加者があり、またこのような評価をいただき、企画側として大変喜ばしいことと感謝しております。

我々は、ますます進む人口減少と高齢化による社会を迎えようとしています。産業看護職への役割期待は、さらに高まってくると考えられます。日本産業看護学会が、今後も産業看護職にとって、様々な課題に対して、積極的に考え意見交換でき、交流できる場であり続けることを期待したいと考えます。



会長講演と会場風景



メインシンポジウムの様子

特 集

ICOH 2018 DUBLIN—IRELAND に参加して

一般社団法人 医学と社会・連携支援機構 理事長
伏見・長東伝クリニック 院長

小林 章 雄



第 32 回国際産業衛生会議は 2018 年 4 月 29 日—5 月 4 日に Dublin にて開催されました。日本からの参加者は 123 人で、アイルランド、米国に次いで 3 番目に多い参加者でした。学会は最後にダブリン宣言

(<http://www.icohweb.org/site/news-detail.asp?id=148>) を公表して幕を閉じました。また、すべての発表の abstract は、IF 値 3.965 の Occupational and Environmental Medicine の Supplement として公表されています。(https://oem.bmj.com/content/75/Suppl_2)

学会の最中、5 月 2 日(水)の 19:00~、学会場にほど近いレストランで、JAPAN NIGHT in DUBLIN という日本人参加者の懇親会が開催され、50 人を超える日本人参加者が参集、楽しい歓談のひと時を過ごしました。今回、私の席の近くには、国際学会は初めてというような若い産業医の方々もおられ、日頃の仕事の苦労や、研究上の問題などを熱心に問いかけられ、あらためて産業衛生の領域での若々しい熱意に触れることができ、大いに勇気づけられました。この会の取りまとめをしてくださった ICOH 事務局の吉川徹・悦子先生ご夫妻による懇親会のパンフレットには、つぎのように書いてありました。「・・・国内では話しかけることのできない、〇〇先生や△△先生も海外ではとってもフレンドリー? この機会に国際的&学際的なネットワークを広げましょう!」海外の学会へ参加して、自分の研究成果を国際的な場にさらけ出すこと、また様々な国の研究者の発表を目の当たりにすることは、刺激



学会場

的であり、視野を広げ、研究や実践のモチベーションが高まることはいうまでもありません。それに加え、私が確信を持って強調したいのは、「海外の学会における日本人参加者同士の出会いと交流」もまた、その後の人生に大きな影響を与える可能性があるという点です。国内学会にあっては、共通の文化様式の枠組みの中で、予定調和的なメリハリのない交流に終始しがちなわけですが、海外の学会にあっては、何が出るか、予期できない行動をしいられるような、ある種の緊張感の中で、くっきりとした相互交流が可能になるのではないのでしょうか? 海外の学会における出会いと交流は多くを生み出す可能性があります。若い諸君には、ボーナスをすべて叩いてでも参加することを強くお勧めします。

3 年後の 2021 年 3 月 21 日~26 日には ICOH 第 33 回大会が Australia の Melbourne で (<http://www.anssom.org.au/icoh-2021>)、その 3 年後の 2024 年には第 34 回大会が Morocco の Marrakesh で開催される予定となっています。



ポスター会場



夕暮れの Dublin

インタビュー

「瀬戸を基点に安全衛生 65 年」 山元 正義先生（愛知県健康管理機関協議会事務局長）に聞く



愛知県瀬戸市は全国的にも古くから窯業が盛んなことで知られています。しかし、輸出品の生産が盛んにおこなわれていた高度経済成長期にはじん肺、有機溶剤中毒、鉛中毒などの労働衛生上の問題に悩まされてきました。これらを克服しようと長年努力された多くの先輩の先生方がいますが、今回は窯業に関わる労働衛生対策を主な課題として設立された労働衛生機関、瀬戸健康管理センターの創設にも関わられ、その後長年にわたって働く人々の健康管理の活動を見つめて来られた山元正義先生にお話をお聴きしました。

学生時代とその後就職にいたるまでの社会の状況から当時どのようなことをお考えでしたか。

私の実家は福井県でしたが、父親が税務署に勤務していて転勤が多く、昭和3年、当時父親の勤務地だった静岡県磐田郡見付町（現在は磐田市）で生まれました。昭和20年に名古屋第一工学校応用化学科を卒業しました。敗戦直前の勤労動員では熱田区の陸軍高蔵工廠第三工場では風船爆弾の製造をし、8月15日もそこで迎えました。終戦後は当時ビキニ環礁での原子爆弾実験とこれに伴う放射線被ばくに注目が集まってきました。私自身もそのような状況をみてこれからは原子力の平和利用の時代ではないかと思っていました。

そんな時に放射線医療ができるという大阪物療専門学校放射線学部の新聞広告を見て応募して入学、昭和24年に卒業し、放射線技師の資格を得ました。昭和26年に大阪大学医学部放射線医学教室の研修生として臨床の現場で経験を積みました。この頃は無給で、新聞社の健康診断でアルバイトをしながらの生活でした。その後、名古屋で柔道整復師をしていた兄から瀬戸健康保険組合で放射線技師を募集していることを聞き、瀬戸の街を歩いてみると窯から立ち上る煙で空が黒くなっていて、咳が出そうなくらい空気が汚れていました。呼吸器にはよくない環境で人々が生きている中で放射線技師として働くことができれば地域社会の役に立てるだろうと思い、ここで働こうと考えました。

どのような経緯から労働衛生に関われようになったのでしょうか。

昭和28年11月に瀬戸健康保険組合に就職しました。当時の瀬戸は結核が蔓延していて、市をあげて結核検診に取り組んでいました。今集団健診で使用する検診車のような便利なものはなく、可搬型の胸部エックス線撮影装置を診療所で分解して検診場までオート三輪で運搬し、再度組み立てて撮影していたものでした。これでは効率が悪く何とかならないものかと思っていましたが、その後医療機器メーカーの東芝との共同で国鉄バスの瀬戸-明智線で廃車になったバスの車両に鉛の遮蔽材を張り、我が国初のエックス線撮影装置(XO-100型)を搭載した検診車を開発して使用を始めました。当時の健康課題は窯業じん肺というよりも結核対策が中心だったのです。瀬戸健康保険組合が中心になって厚生年金の補助金を利用して昭和29年5月に瀬戸健康管理センターを設立しました。今では名称が「センター」となっている労働衛生機関は珍しいものではありませんが、当時としては斬新な命名で、全国初の労働衛生機関としての「センター」でした。じん肺法が昭和33年に成立した後は、瀬戸の健康診断の重点は結

核からじん肺に移行していきます。瀬戸健康管理センターはその後昭和 38 年に現在の場所に新築移転しました。この年、真新しいセンターの建物の 3 階講堂で日本産業衛生学会中小企業衛生問題研究会（現在は中小企業安全衛生研究会に改称）の第 1 回全国集会在開催されました。現在も続く伝統ある研究会の記念すべき第 1 回で私も研究報告をしています。

労働衛生機関としての瀬戸健康管理センターが誕生したことで、同じく窯業が盛んな多治見、自動車産業を中心とした製造業が盛んな豊田市でも同様の労働衛生機関が誕生することになりました。昭和 39 年には愛知県健康管理機関を組織する愛知県健康管理機関協議会を設立し、私は事務局を担当することになりました。また、本省で中央じん肺診査医だった三浦邦広先生が愛知労働基準局の労働衛生課長に異動され、私は労働省から労災防止指導員という資格をいただいて三浦先生と一緒に多治見を含めたじん肺対策に取り組み、健康診断を進める一方、現場への集塵機の設置や防塵マスクの着用を進めました。作業環境測定も始まりました。これらの対策が進み始めたのは昭和 40 年代に入ってからだったと思います。また、昭和 39 年には全国産業安全衛生大会が名古屋で開催され、瀬戸でも分科会が開かれました。市内にいくつかアドバルーンがあがっていたことを覚えています。一方、昭和 35 年には当時の労働福祉事業団が多発する窯業じん肺に対応するため、地元の労使の団体、窯業関係者の要請を受けて瀬戸市に隣接する尾張旭市の丘陵地にじん肺専門病院を設置します。これが昭和 37 年に旭労災病院になります。

当時の窯業じん肺の状況はどのようなものだったでしょうか。

当時の瀬戸はノベルティーと呼ばれる人物・動物などをかたどった置物の輸出が好調で、全国の窯業生産地の中でも瀬戸がほぼ独占的に生産していました。設備が貧弱な中、労働衛生対策よりも生産を優先させるところもあり、様々な問題が噴出していました。最盛期には瀬戸市内各地に窯からの煙突から黒い煙が立ちのぼり、市内を流れる瀬戸川は黄土色に濁っていましたが、それらを瀬戸の繁栄を裏付けるものとして市民も

それほど問題視していませんでした。現在は瀬戸の窯業関係の事業所数は約 200 カ所ですが、当時は約 450 カ所もありました。窯業労働者に重症のじん肺患者も出るようになり、若くして亡くなる作業者もいました。窯業労働者の夫をじん肺で亡くした女性が残された幼い子どもを養うため、やむなく珪砂工場での袋詰め作業をしていたのですが、子どもを預けるところがなく、粉じんが舞う作業場に連れてきて作業していました。昭和 35 年頃のことだったと思います。その後この母子はともにじん肺か、粉じんによる呼吸器の病気で亡くなったという例を知っています。当時の一般的な現場作業の月給は 1 万円程度でしたが、瀬戸での窯業事業場での珪砂の袋詰め作業は 12 万円くらいの月給が出ました。瀬戸は陶磁器産業全盛時代で景気は良かったのですが、命や健康の代償を払いながらといった面もないとはいえませんでした。

瀬戸の窯業現場は昭和 40 年代に次第に集塵装置や防塵マスクの着用が進みました。しかし、一方では瀬戸のノベルティは米国では鉛を含む顔料のついた置物を子どもが舐めることで鉛曝露が問題になり、次第に売れ行きが落ちていきます。現場の労働衛生対策が進むとともに、皮肉なことに瀬戸窯業が衰退期を迎えることで新規のじん肺患者の発生も少なくなっていきました。オイルショックの頃になると日本経済全体が大きな打撃を受ける中で、健康診断や労働衛生対策にお金をかけることが無駄ではないかという風潮が現れるようになったと思います。このような考え方はオイルショックなどの危機だけに現れるものではありませんが、特にその傾向が強い時期でした。

窯業に携わる人々には多数のじん肺有所見者がいて、重要な地場産業である窯業を発展させるうえではじん肺対策は喫緊の課題でした。また、絵付けで使用される顔料に含まれる鉛、顔料を溶かす有機溶剤として使用されていたベンゼン（当時はベンゾールの名称が一般的でした）は皿に入れて筆を洗うのにも使用されていて、作業者の曝露濃度は低くなかったと思います。白血病の発症は聞いていませんが、女性が多かった絵付け作業者の間にベンゼンや鉛曝露が原因と考えられる貧血は多発していました。

当時、指導を受けた先生方にはどんな方々がいらっしゃるのでしょうか。

私が瀬戸で窯業じん肺に関わる活動を始めるようになった当時は名古屋大学医学部衛生学教室は鯉沼茆吾先生が教授をされていました。教室には奥谷博俊助教授(後の名古屋市立大学公衆衛生学教授)、井上俊講師(後の名古屋大学衛生学教授)も在籍されていて、鯉沼先生が奥谷先生に対しては窯業じん肺研究を、井上先生にはベンゼンをはじめとする有機溶剤中毒の研究をするように指示されていたことを覚えています。こうして名古屋大学衛生学は奥谷・井上両先生がこの東海地方会でも指導的な立場になられ、全国のじん肺、有機溶剤中毒研究の中でも重要な位置を占めるようになりました。その後、東海地方会を中心とするじん肺・有機溶剤中毒研究は島正吾先生、竹内康浩先生らにそれぞれ引き継がれていくことになったと思っています。その後井上先生が名古屋大学の教授になられてから私は医学部衛生学講座の非常勤講師になり、約10年間実習で学生さんのお世話をさせていただく機会をいただきました。

瀬戸焼にも造詣が深いとお聞きしていますが。

私は瀬戸で働くようになってから、やはり焼き物に関心が行くようになり、銘品の鑑賞が私の大切な趣味になりました。今では文化財保護法で規制されていますが、瀬戸地域周辺には鎌倉時代の窯跡がたくさんあり、これらをよく見学したものでした。後になって私は瀬戸市の文化財保護委員会の副会長を拝命して瀬戸の地場産業である焼き物の保護の活動をするようになりました。

これからの労働衛生、健康管理はどうあるべきとお考えでしょうか。

平成10年に瀬戸健康管理センターから日本予防医学協会に異動し、愛知県の認可を受けて東海事業部の診療所を設置しました。当時の診療所長は奥谷先生でした。これからの労働衛生機関・健診機関は現場が何を必要としているのかを中心に事業展開をしなければなりません。出生減と高齢化が進み、人口が減少するようになり、青年期・壮年期の健康管理は従来のやり方

で進められるとしても、子どもたちと高齢者に対しては健康管理の新しい枠組みや施策を考えなければならぬと思います。「予防医学」という言葉がありますが、これはもう古くなっているのではないかと思います。人々が健康に生きるための医学、すなわち「健康医学」という言い方ができるかも知れません。単に疾病や作業関連疾患を予防するだけでなく、より健康に生きることを考えなければなりません。健康に生きるためにどのような生活習慣や働き方、生活と労働の環境を提案することが必要になっているのではないかと思います。瀬戸健康管理センターが行ってきた中小企業・小規模事業場の労働衛生管理の経験は今後東南アジアで活かせるのではないかと思います。

瀬戸の窯業は焼き物の町として発展しましたが、もう容器としての焼き物の時代は終わったと思います。瀬戸は今後ファインセラミクス、極小碍子、低圧・高圧の絶縁体など新しい時代の工業原料を開発する方向での発展を模索することになるでしょう。そうなれば新しい労働衛生の課題も出てくるだろうと思われれます。若い世代のこれからの研究に期待したいと思います。

インタビューを終えて

瀬戸の地場産業である窯業はじん肺、有機溶剤、鉛、さらに小規模事業場の安全衛生など古典的な労働衛生の課題から現在も私たちに突き付けられている産業保健全般の課題も含んでいて、多くの研究者が瀬戸をフィールドとして研究成果をあげ、育っていったことを痛感しました。山元先生はこの長い経過を見つめてきた生き証人とも言える方で、現代に生きる私たち、さらに次の世代にとっても先生の人生から学ぶべきことが多いと思います。これからも私たちへのご指導をよろしくお願いいたします。

(聞き手：柴田 英治、久永 直見)

特 集

第 92 回日本産業衛生学会の開催へ向けて

企画運営委員長 齊藤 政彦



いよいよ、第 92 回日本産業衛生学会が間近に迫ってきました。2019 年 5 月 22 日 (水) から 25 日 (土) まで、名古屋国際会議場で開催いたします (ホームページ：<http://www.congre.co.jp/sanei92/>)。東海地方会の皆様の多大なご協力により、滞りなく準備が進んでいます。また、企画運営委員からの提案を元に、教育講演、シンポジウム、パネルディスカッションなど、魅力的な企画を数多く揃えることができました。

今回の学会のメインテーマは『現場への貢献！ ～人、企業、社会を支える～』です。産業衛生学は実学であり、実際の産業現場に役立ってこそ意義がある、という理念の下、労働者の健康を保持増進し、それを通して企業の安定・発展へ貢献し、日本社会の繁栄に寄与する、という趣旨です。

産業現場には多くの疾病要因が存在し、時代とともに変化して来ました。昔は事故による災害や、有害環境による職業病が主でしたが、近年は、心理的ストレスからくるメンタルヘルス不調の増加が顕著です。また少子高齢化に伴い、病気を抱えながら就労する労働者が増え、治療と仕事の両立支援が注目されています。さらに、過労死等防止の観点から、働き方改革が国民的課題となり、法案が成立し、今後はいかに実践するかが課題となっています。働き方改革が適切に行われるために、産業医および産業保健機能の強化が図られます。ますます産業衛生学的重要性が高まっていくと考えられます。

一方で、産業界の変化は目まぐるしく、急速に AI (人工知能) やロボットが職場へ導入されてきています。仕事内容や労働者の役割が大きく変貌しようとしており、近い将来、仕事、労働、職場などの、基本的概念が変わる可能性もあります。

今学会では、ホットな話題をいろいろな切り口で取り上げます。皆様の期待に十分応えうる内容と自負いたしております。これに加え、本部企画として他学会との合同シンポジウム、国際交流の一環として主にアジアから若手を招いてのシンポジウムも企画しています。

また**若手の研究促進**を目的に、筆頭演者が 40 歳未満の一般演題を対象に、**優秀演題賞**を授与したいと考えています。5 名の企画運営副委員長にそれぞれの視点で選んでいただく予定です。

学会は、学術的議論の場であると同時に、人間関係作りの機会でもあります。懇親会では、『名古屋メシ』を十分に堪能していただく手配を進めています。食事を摂り、お酒を飲みながら親睦を深めていただければと考えています。

最後に、**早めの事前登録**をお願いします。何より、多くの方にご参加いただけるかどうか、成功のカギを握ります。本番間近、学会員だけでなく、会員以外の方にもご参加いただき、日本産業衛生学会を知っていただく機会となることも大切と考えています。お誘い合わせて、多数の方のご参加を、心よりお待ち申し上げます。よろしく申し上げます。

教室紹介

はじめまして！ 日本福祉大学看護学部地域看護学領域です。

水谷 聖子

日本福祉大学は 1953 年短期大学、1957 年に日本福祉大学に改組し、日本初の 4 年制の「社会福祉学部」からスタートしています。1983 年には愛知県知多郡美浜町に総合移転し、現在は美浜キャンパスを拠点に、半田キャンパス（半田市）、名古屋キャンパス（名古屋市）、2015 年に東海キャンパス（東海市）を開設し、4 キャンパス 8 学部 10 学科を有する**ふくし**の総合大学です。「ふくし」は、普通の暮らしの幸せを意味し、愛知県の知多半島に貢献することを大学としてのミッションとしています。

看護学部看護学科は、2015 年に地元、東海市のご理解とご協力のもと開設しました東海キャンパスにあります。看護学部生は全員が看護師を目指し、保健師志望や地域志向のある学生 15 名が保健師課程を履修します。特徴的な教育は、東海市の全面協力を得ながら進める 1 年生の基礎ゼミナールです。大学における学習方法の習得に併せて、『東海市の健康』をテーマに全員で取り組みます。既存資料の調査、インタビューやフィールドワークでは、「東海市役所」、健康と福祉の拠点「東海市しあわせ村」、「子育て総合支援センター」、地域ごとに健康増進や交流促進を進める「健康交流の家」、緩衝緑地公園などを訪問させていただき学習します。今年度は完成年度を迎え、初めて卒業生が旅立ちます。これから本学看護学部の真価が問われることになると思います。

地域看護学領域は、地域で生活する人々の生活や健康を支援するための基本的な考え方や支援方法を学習します。5 名の教員は、看護師課程の在宅看護論、保健師課程の公衆衛生看護学および関連科目など、保健師国家試験受験資格取得科目を主に担当しています。

教員は、行政、事業所、医療機関、海外、NPO など様々な場で保健師としての経験があり、研究分野もさまざまです。子育て支援、在日外国人の母子保健、学童期にある子どもの居場所支援、介護予防、看護師の疲労と生活習慣・自己効力感の関係、ホームレス・生活困窮者の健康支援、結核患者の効果的な服薬支援などです。東海市とは日本老年学的評価研究会（JAGES）と共同する研究会に出席し東海市の健康課題、「健康交流の家」の効果検証に関する研究を継続しています。また、子育て支援や地域在住災害支援ナース養成などパイロットスタディーを行い、継続して事業化しています。

現役の保健師への支援は、産業保健分野の保健師の自主学習会を開催しています。現在は第 1 期生の旅立ちを契機に、卒業生の集いや卒業生と協働する卒業後支援についても企画中です。

互いに協力し合い、教育・研究・社会活動などチームワークで取り組んでいるのが特徴です。



左から：中村廣隆（助教）、大橋裕子（准教授）、水谷聖子（教授）、肥田佳美（准教授）、加藤まり（実習講師）



岡本ちさと（助教）

受賞記事

産業技術部会奨励賞 受賞報告

愛知教育大学保健体育講座 准教授 榊原洋子(衛生管理者)



このたび第91回日本産業衛生学会におきまして、産業技術部会奨励賞をいただきました。大変光栄に存じます。2004年の国立大学法人化により勤務する愛知教育大学で衛生管理者(第一種衛生管理者・衛生工学衛生管理者)となりましたが、当時は産業現場としての安全衛生管理という視点を持つのにさえ大変苦労をいたしました。温かくご指導いただきました久永直見先生をはじめ、ご支援いただきました沢山の先生方に深く感謝申し上げます。

愛知教育大学は教職員600名程度の教員養成系単科大学で、化学物質を取扱う労働者は30名程度ですが、高圧ガスやRIやX線などの放射線業務もあれば、小型クレーンやフォークリフト作業や金属鋳造、ガラス工芸、陶芸、染織の作業現場もあります。大学の研究室や実習室が専門的であるのは言うまでもありません

が、作業の手順や使用する道具には伝統的なこだわりもあり、大変興味深い現場であると同時にそれぞれ潜在的な課題がありました。第86回の産業医・産業看護全国協議会(名古屋)では、斉藤政彦先生、加藤隆康先生、城憲秀先生らのご指導をいただきつつ、第11回四部会合同セミナーを本学で開催し、多くの学会員のみなさまからのご指摘やご提案をいただいて、現場改善にもつなぐことができました。

最近、図書館の古典籍に撒かれた粉末殺虫剤BHCを除去する作業への安全衛生対策を講じる中で、不純物として石綿が含まれていることを突き止め、石綿作業主任者の資格も取得し、より安全で快適な作業と作業環境を創造しようと努力中です。多様な有害業務への的確な衛生対策は容易ではありませんが、労働者が安全により快適に仕事ができるような取り組みを学会で発表するように心掛け、精進したいと思います。今後とも、ご指導のほどよろしく願いいたします。

会員の声

入会のご挨拶

パナソニック(株) 四日市事業所 健康管理室 保健師 堀田衣美



はじめまして。2017年4月からパナソニック(株)四日市事業所の健康管理室で保健師として採用されました、堀田と申します。大学在学中から産業保健の分野に興味を持ち、卒業後現在の会社に入社しました。

「パナソニック」と聞くと家電製品をイメージする方が多いと思いますが、四日市事業所は自動車エンジン内の樹脂部品の素材や、半導体の黒いカバー部分の素材、また電子機器のプリント基板の基材等、電気製品の材料系製品を四日市工場と隣の南工場の2拠点で製造しています。従業員数は2拠点併せて460名前後と、あまり多くはありませんが、化学物質を多く扱う化学工場であるため、健康管理室業務においては、特殊健診の対象人員・項目が多い事が一番の特徴となっています。当健康管理室は、嘱託産業医3名及び、保健師1名(私)で業務を推進しています。

パナソニックグループで他事業場に勤務の産業保健

スタッフの方々をはじめ、多数の方々に支えられ、一年半を過ごすことができました。

現在、力を入れていることの一つとして特定保健指導があります。従業員の皆さんからは、「良いきっかけになった」と積極的に取り組む方もいれば、呼び出しに応じてもらえない方もおり、動機付けの難しさを感じています。しかし取り組む中で、実際に①5kg~10kgの減量に成功、②服薬が必要となる検査値が服薬不要となった、等のケースを経験すると、やりがいを実感し次のステップへの意欲がわいてきます。

保健師としては1人勤務ということで、日常業務に忙殺されている日々ではありますが、従業員の皆さんが積極的にご自身の健康を考えることが出来るよう、さらに取り組んでまいります。

今後は学会、研修会等積極的に参加し、他社の産業保健スタッフの皆様にご教授を頂きたいと思っています。皆様にはご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

笑いと言業保健と言表情フィードバック仮説

藤田医科大学 医学部 公衆衛生学講座 太田 充彦



笑いは満足感や痛み閾値の増加、コルチゾールの分泌低下といった精神生理的効果をもたらします。働く人たちの心理的なストレスやそれに伴う健康問題の予防対策になるかもしれません。しかし、通常は何か面白いこと・笑わせるもの(ユーモア)に誘発されて人は笑います。ユーモアがないと笑うことは無理なのでしょうか?

「自分で意図的に笑い顔を作って笑い声を出したらいい。」

この疑似的笑いも健康に良いというアイデアは、表情フィードバック仮説 Facial feedback theory に基づきます。表情を作れば身体に変化が起こり感情が生

まれるという仮説です。楽しいから笑ってリラックスするのではなく、笑い顔を作ったらリラックスできて楽しくなるという理屈です。この仮説が正しいかはまだ議論がありますが、私たちの講座では無作為化比較試験を実施し、疑似的笑いと言ヨガの呼吸法・ストレッチ等を組み合わせたプログラムがコメディ映画を見るのと同様にコルチゾール値を下げることを発見しました(Complement Ther Clin Pract 2018; 32: 6-11)。疑似的笑いの健康への好影響を部分的にでも支持しているかもしれません。

笑いで人々の健康が実現できるか、その科学的根拠を引き続き追究できればと思っています。(本稿の公表に関しては、いかなる個人・団体とも利益相反はありません。)

4K・8K 放送、3D テレビ、スマートグラスの3つの技術について思う

(公財) 名古屋産業科学研究所・上席研究員 宮尾 克



新4K・8K衛星放送が、12月1日からはじまります。特徴は高精細、広色域化、画像の高速表示、多階調表現、高輝度(HDR)です。ここで、3Dテレビを思い出します。3Dテレビは2010年からはじまり、12年をピークに、17年に終焉しました。当初は液晶シャッター眼鏡の使用が難点でした。1台1万円で、家族で数万円かかり、顔を傾けると立体が崩れました。3Dの命である飛出しも引っ込みも控えめで、迫りに欠けていました。これは、3D安全ガイドラインで、3Dの飛出しを視差1度以内に制限したことが原因でした。1m離れた画面から、21cmの飛び出しが限界です。平均10cm程度しか飛び出しません。レリーフ像みたいですね。視差1度の根拠となった論文は、実は、2度という結果の誤解(読み間違い)だったことが判明しました。日本の3Dテレビだけが、過剰な規制の産物だったのです。(参

考:私の旧研究室の小嶋健仁博士の論文。社会医学研究31:1, 69-79. 2014. ダウンロード可能。)

いま、将来を囑望されている透過型スマートグラス(HMD)にも、技術的・人間工学的問題点の指摘があります。私たちは、下記のガイドラインを提案しています。

1. 拡張現実における作業ガイド(実物と重畳しながら見比べる作業指示の仮想画面など)は、作業対象と同じか、やや手前に表示しないと、ガイドが見えない。
2. スマートグラスの瞳孔間距離の設定は、多くの作業者に、適合すべきである(99%以上の男女に適合:55~71mmの可変)。
3. 仮想的ガイドは、操作対象と同程度の輝度にすべきである。
4. 仮想的ガイドの画面イメージの計算処理速度は、十分に早いことが必要である。

労働衛生機関としての産業保健活動

社会福祉法人 聖隷福祉事業団 保健師 中西湖雪



はじめまして。聖隷福祉事業団保健事業部で保健師をしている中西と申します。当事業部は労働衛生機関であると共に、年間約56万件の健康診断を実施しており、健康診断の事後措置にも注力しています。特に2008年度からは産業医科大学の支援を受けて保健指導品質管理システムを導入し、保健指導の質の向上に努めています。研修体制もPDCAを回しながら10年が経過し、今では事業部外でも実施させていただいています。産業保健の分野では、事業部内の労働衛生コンサルタント事務所と連携して、産業医と産業看護職がセットで産業保健を展開できるようになりました。ま

た、最近では健診の問診時に看護職が特定の事業所で生活習慣が悪い、精密検査の未受診が多い等の気づきを通じて健康診断結果を解析し、事業所に往訪して事業者に現状の説明と今後の支援を行うようになりました。産業医選任の義務がない小規模事業所は、健康課題を解決するための支援がまだまだ不足しています。当事業部の理念である「わたしたちは利用者の皆様と力を合わせてお一人おひとりの健康の実現を支援します」を通じて、働く人すべてに健康支援が届けられるよう、これからも東海地方会で開催される研修会をはじめ会員の皆様から多くのエネルギーとお知恵を拝借していきたいと思っています。今後ともご指導ご支援よろしくお願い致します。

事務局から

平成30年度総会決議から

1. 第1回総会を11月24日(土)に名古屋市で開催した。
2. 平成31年度事業計画案、予算案が承認された。
3. 次期監事案が承認された。
4. 選挙細則および地方会規約の改定が承認された。

地方会理事会

平成30年度第2回理事会

日時：平成30年10月13日(土) 10:00-12:00
場所：名古屋市立大学医学研究棟 11階 講義室A

【議題】

- I. 前回理事会議事録(案)の確認
- II. 協議事項
 - 1) 代議員選挙関連および今後の予定について
 - 2) 平成30年度総会について
 - 3) 本部より経理に関する依頼について
 - 4) 2019年度学会開催地について
 - 5) 次回の理事会日程について
 - 6) その他
- III. 報告事項
 - 1) 平成30年度地方会学会準備報告
 - 2) 第31回産業保健スタッフのための研修会準備状況報告
 - 3) 本部理事会報告

- 4) 地方会事務局報告
- 5) 地方会活動方針検討委員会
- 6) 学術研究推進委員会
- 7) 編集委員会
- 8) 研修会企画委員会
- 9) 表彰制度推薦委員会
- 10) 部会報告
- 11) 研究会報告
- 12) 各県の活動報告
- 13) その他報告事項
- 14) 関連学会等開催情報
- 15) その他

会員状況

平成30年6月1日～8月31日の推移
(平成30年8月31日時点)

	愛知県	静岡県	三重県	岐阜県	合計
新入・再入会員	2	2	3	1	8
転入会員	1	0	2	0	3
地方会内転入	0	0	0	0	0
退会会員	-3	-2	0	0	-5
転出会員	0	-2	0	0	-2
地方会内転出	0	0	0	0	0
増減	0	-2	5	1	4
本部正会員	469(1)	217	110	38(1)	834(2)

※()は学生会員を表す

平成30年度日本産業衛生学会 東海地方会選挙結果

1. 会長選挙当選者

斉藤 政彦

2. 代議員選挙当選者(県別、50音順)

(愛知県：定数36)

石川 浩二	市丸麻衣子	伊藤 由起
上原 正道	浦上 年彦	榎原 毅
大久保浩司	太田 充彦	加藤 一夫
加藤 隆康	上島 通浩	川角 美佳
高畑 真司	小林 章雄	斉藤 政彦
酒井 潔	榊原 洋子	佐藤 博貴
白石 知子	塚田 月美	内藤 久雄
中元 健吾	那須 民江	七浦 広志
成定 明彦	西谷 直子	西村 夏弥
久永 直見	平野 貢	松浦 清恵
水口 要平	水谷 聖子	村崎 元五
八谷 寛	山本 直樹	渡井いづみ

(静岡県：定数18)

青山 行彦	赤津 順一	秋山ひろみ
足立留美子	池田友紀子	内野 文吾
遠田 和彦	尾島 俊之	近藤 祥
清水 正昭	菅沼要一郎	巽 あさみ
土屋真知子	中村美詠子	新島 邦行
西 賢一郎	三浦 真美	山本 誠

(三重県：定数9)

河南 文子	北山 勉	後藤 由紀
後藤 義明	酒井 秀精	筈島 茂
高崎 正子	古田さと	松田 元

(岐阜県：定数3)

井奈波良一 黒川 淳一 牧野 茂徳

3. 本部理事候補者選挙当選者(3名・50音順)

上島 通浩 斉藤 政彦 筈島 茂

これからの行事予定

第31回産業保健スタッフのための研修会

日時：2019年2月2日(土) 13:00-17:00

場所：アイ.エム.ワイ.貸し会議室 千種 5階
第3会議室

テーマ：労働者における睡眠問題と対策

第89回日本衛生学会学術総会

会期：2019年2月1日(金)～3日(日)

場所：名古屋大学 東山キャンパス

テーマ：異分野融合による次世代衛生学の構築

平成30年度東海地方会産業医部会懇話会

日時：2019年3月2日(土) 13:30-17:00

場所：ウィンク愛知 906会議室

特別講演：ベトナムの病院での命を救う改善活動
～大切なことは産業保健から学んだ～

第90回職場ストレス研究会

日時：2019年3月22日(金)

場所：ウィンク愛知

第92回日本産業衛生学会

会期：2019年5月22日(水)～25日(土)

場所：名古屋国際会議場

テーマ：現場への貢献！ 人、企業、社会を支える。

編集後記

2018年9月に平成最後の日本産業衛生学会全国協議会が東京で開催されました。

そして2019年5月には第92回日本産業衛生学会が名古屋で開催されます。新しい元号で行われる初めての学会が東海地方会担当で開催されるということで、とても楽しみに思っています。地方会理事に限らず、地方会員全員で素晴らしい学会となるように、協力していきましょう。

ヤマハ株式会社 山本 誠

東海地方会ニュース

編集委員長：池田友紀子(キヤノン)

副編集委員長：西谷 直子(名古屋大学)

編集委員：赤津 順一(日本予防医学協会)

榎原 毅(名古屋市立大学)

河南 文子(富士電機)

後藤 由紀(四日市看護医療大学)

近藤 祥(聖隷健康診断センター)

榊原 洋子(愛知教育大学)

菅沼要一郎(浜松ホトニクス)

城 憲秀(中部大学)

山本 誠(ヤマハ)

東海地方会事務局

〒541-0056 大阪市中央区久太郎町2-1-25 JTBビル7F
株式会社 JTB コミュニケーションデザイン
ミーティング&コンベンション事業部内
FAX: 06-4964-8804 E-mail: jsok-tokai@jtbcom.co.jp

印刷・製本

〒675-0055 兵庫県加古川市東神吉町西井ノ口601-1
有限会社トータルマップ
TEL: 079-433-8081 FAX: 079-433-3718